

目的 地方社会の場合，1)人口の都市への流出，過疎化にともない，若い世代との別居が余儀なくされ，親世代，子世代別々の核家族世帯あるいは単身世帯が増える一方である。2)平均寿命の延長による老年期の延長等の理由から，同居のあり方について再考したい。まず，第1報として，国東地方における隠居慣行の存続する地域での同居形態と同居にともなう慣行について報告する。

方法 和歌森太郎編の『くにさき』(昭和35年)で，当時隠居が確認された姫島村^{ひめが}大海，国東町^{くにとう}深江，国見町^{くにみ}西方等の4ヶ所を聞き取り調査を行なった。

結果 深江と西方寺は人口流出，過疎化が激しく，三世代同居の例は少数しかなく，老夫婦のみ，あるいは単身世帯が目立った。対象的に，大海，富来は隠居屋が多く存在している。大海では，長男の結婚と同時に親夫婦は母屋を長男夫婦に明け渡し，同一敷地内に隣接して移り住む。年齢の接近した弟妹が嫁つくまで，長男夫婦を先に隠居屋に入れ，後で入れ代わる例もある。富来では，完全に独立せず，納屋と兼用あるいはその二階といった具合に改造されて使用している。大海も富来も，隠居屋は子供が建てた習わしであるが，部屋数として富来は1部屋(40%)，2部屋(15%)，大海は2部屋(37%)，3部屋(16%)を当てている。また，同居にともなう慣行として，世渡し，杓子渡しが継承されている。長男が結婚して5~10年後の世渡しが最多で，親夫婦は隠居分をもらう。家計の管理権，家事の運営権，生活様式の決定権，子供の教育権などが含まれる，いわゆる主婦権の譲渡である杓子渡しは，長男が結婚して次の日からというのが最多である。